

第15回ひょうご新聞感想文コンクール 兵庫県知事賞

「戦時下の障害者」 9年1組 大西 ほのか

七月に、養護学校との交流会が開かれた。クラスで出し物を考えたとき、本当に一緒に楽しむことができるのかと不安になった。けれど、交流会では私たちも養護学校のみんなも笑顔で、とても楽しい時間を過ごすことができた。

ある日、「戦時下で障害者はどう生きたのか」という新聞記事を見つけた。これまで学校で平和学習を重ねてきたが、戦争中の障害者について考える機会はなかったので、気になって読むことにした。

白島庸さんは、現在八十八歳の視覚障害者だ。七歳の頃に自転車の事故で左目を失明し、八歳だった一九四四年に盲学校に入学した。当時の授業は、戦闘機の飛行音を聞き分ける訓練だった。陸軍が監修したレコード「敵機爆音集」を繰り返し聞かされ、国の役に立つようと飛行音を覚えさせられたそうだ。八歳といえば、小学三年生だ。私は、障害のある子供までもが、戦争のために学校でこのような訓練をさせられた事実には驚きを隠せなかった。障害者は兵士として戦場へ行くことができないため、防空監視要員として動員する狙いがあった可能性がある」と記事には書かれていた。健常者より聴覚が優れていると考えられ、石川県では実際に防空監視に従事した例もあったそうだ。

私が一番驚いたのは、徴兵が免除されていた障害者は、「ごくつぶし」や「役立たず」と言われ、差別の対象となっていたことだ。弱い立場の人が守られず、生と死を分けるような状況でも差別があったことに強い憤りを感じた。しかし、よく考えてみると、私も交流会をする前は、障害のある子達と交流するなんて難しいと思い込み、勝手に壁を感じていたように思う。実際には、歌を歌ったり、クイズを出し合ったりなど、お互いに工夫することによって、楽しい時間を過ごせたというのに。私は、この壁が差別に繋がるのかもしれないと思った。平和な今の時代、私たち若い世代がもっと平等な世の中について考えていかなければいけないと思った。

戦時下では、障害のある子供達が、学童疎開から取り残される事態も起きたそうだ。一九四四年六月、学童疎開が閣議決定され、都市部の児童四十万人以上が地方へ移された。しかし、肢体不自由児が通う光明学校の子供達は、「手に負えない」と取り合ってもらえなかった。結局、校長先生が自ら疎開先を探し出し、間一髪のところでは助かったそうだ。この事実からも、障害者の命がどれほど軽んじられていたかがわかる。

私は今回初めて、障害をもった子供達が、戦時下をどのように生き抜いたのかを知った。白島さんは、平和だがかどこかよそよそしさを感じる今の時代を「本当に助け合える社会になっているのだろうか」と問われた。誰もが平等で、幸せに暮らせる社会を作るために、私達がすべきことはきっともっとたくさんある。